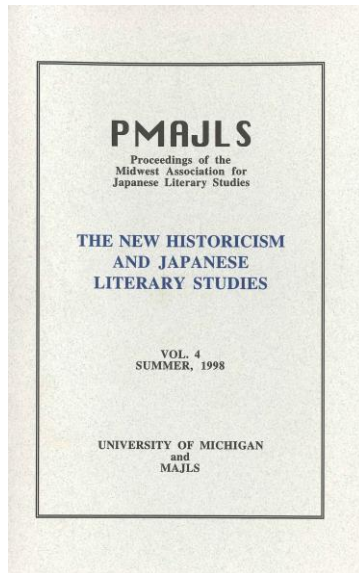


物語の方法と日記文学—『更級日記』を中心に
Sarashina nikki

伊藤守幸 Itō Moriyuki

*Proceedings of the Midwest Association for
Japanese Literary Studies* 4 (1998): 369–379.



PMAJLS 4:
The New Historicism and Japanese Literary Studies.
Ed. Eiji Sekine.

物語の方法と日記文学——「更級日記」を中心に——

伊藤守幸 (Itō Moriyuki)

弘前大学

—

自伝的性格を有する仮名日記という新しい様式を確立した『蜻蛉日記』は、その序文にあたる文章の中で「古物語」の「そらごと」について批判的に言及し、「身の上」のことを記す日記と対置している。ただし、この文章では、「古物語」に「そらごと」の多いことが指摘されるだけであり、物語に関するそれ以上の論究はなされない。そして、実はこの程度の言及でさえ『蜻蛉日記』の中では例外的な事例であり、この序文以後、物語のことが取り立てて話題として持ち出されることもないのである。

そんな『蜻蛉日記』に対して、女性によって記された自伝作品という点では共通の性格を有しながら、自己の境涯を物語との関係において捉え直そうとしている点で、主題論的には『蜻蛉日記』と対照的な関係にあるのが、「更級日記」である。そして、物語との関係をめぐる二作品のこのような対照性には、『源氏物語』の存在が深くかかわっていると考えられる。なぜなら、孝標女と道綱母の決定的な差異は、孝標女の愛読書が「古物語」の類ではなく、『源氏物語』だったという点に認められるからである。

『源氏物語』は、作中の様々な芸術論の存在からも知られるように、きわめて批評的性格の強い作品であるが、なかでも蜚巻の物語論は、紫式部の物語観を窺わせる言説として注目されるものである。そこでは光源氏の言葉を借りて、「ここのなかに、まことはいと少なからむを」¹と、『蜻蛉日記』と同様の「そらごと」批判が展開される一方、「日本紀などは、ただかたそぼぞかし」と、正史をも引き合いにしながら、史書に劣らぬ物語の価値が詳しく論じられてもいるのである。そのよう

¹ 引用は、石田穰二・清水好子校注『源氏物語』（新潮日本古典集成）による。

に主人公の言動を通じて物語に対する多面的な批評を展開する『源氏物語』に対して、『蜻蛉日記』の起筆部に記されたような素朴な「そらごと」批判が、批評的意味を持ち得ないことは明らかである。『源氏物語』の内部において展開される物語批評は、同時代の素朴な物語批判（たとえば『三宝絵詞』にも『蜻蛉日記』と同趣旨の「そらごと」批判が見られる）に比べて、遙かに高度な批評性を獲得しているのである。

孝標女が十四歳の頃から暗唱するほど耽読した『源氏物語』は、そのように優れた物語批評を内包する作品であり、そんな物語とともに育った彼女が、やがて晩年に至って、物語と人生の関わりを重要な主題とする日記を記すことになったのも、ある意味で当然の帰結と言えよう。『蜻蛉日記』の素朴な物語批判から数十年の後に、平安女流文学は、物語との関係それ自体を「身の上」のこととして問題にするような地平にまで到達してしまったのである。

さて、『更級日記』は、内容的に多岐にわたる記事群を内包する作品であるが、それらの多様な記事群が組み合わされることによって、作品構造もまた複雑な多層性を窺わせるものとなっている。『更級日記』の執筆にあたって、孝標女の関心が専ら「そらごと」の排除という点に向けられていたのだとすれば、彼女は、何もこれほど複雑な構造の作品を作り上げる必要はなかったはずである。もちろん、「日記」を名乗る以上、作中の多様な記事群が、基本的に作者の「身の上」に関係しているのは当然である。その点で『更級日記』と『蜻蛉日記』は共通している。しかし、孝標女は、単に「身の上」にまつわる出来事を継起的に書き並べるだけで事足りるとはしなかったのである。複数の主題やモチーフが複雑に絡み合う『更級日記』は、作品形成の方法に関して言えば、『蜻蛉日記』よりもむしろ『源氏物語』の影響を色濃く窺わせるものとなっているのである。その証左となる事例は幾つも挙げるができるが、本稿では、以下、『更級日記』の冒頭に置かれた東海上洛の記に着目しながら、この日記の内包する複雑な時間構造について具体的考察を試みることにしたい。

二

『更級日記』冒頭の東海上洛の記は、その成立過程に色々と問題を

含む文章である。たとえば、四十年余りの時間を内包する『更級日記』にあって、僅か三カ月の旅行記にすぎないものが、記事量としては作品全体の二割を占めるといふ、極端な不均衡の問題。あるいは、作品の成立時から四十年以上も遡る遠い過去の出来事が、余りにも詳細かつ具体的に描き出されていることの不思議さ。――そうした点については、これまでも議論が重ねられており、上洛の記の原型となる文章が早い時点で成立していたことが推断されている。物証に基づかない議論ではあるが、上洛の記の内実を勘案するとき、何らかの覚書のような文章の存在は、当然予想されるところである。もちろん、仮に覚書の文章が存在したのだとしても、現在我々の目にする上洛の記が、『更級日記』執筆時における相当の加筆、修正を経て成立したものであることにも疑いの余地はない。

上洛の記の成立事情をそのようなものと考えるとき、とりわけ興味深く思われるのは、この長大な旅行記の内部に、執筆時の作者の視点を直接的に反映する述懐がほとんど見当たらないことである。そのため、上洛の記を読み進める読者は、十三歳の少女の目を通して、ほとんど彼女とまなざしを共有したまま、この上洛の旅を追体験することになるのである。そして、そのように少女のまなざしによって描かれた旅の記録を内包しているという点だけでも、『更級日記』は、文学史上に際立った独自性を主張できるのだが、この記事の特異性は、単に十三歳の少女の旅が描かれているという点のみに限られるわけではない。むしろ上洛の記で興味深いのは、執筆時の意識を反映する述懐が排除されているにもかかわらず、そこに描かれた少女のまなざしそのものが、そのまま晩年の作者のまなざしと重なるように見える瞬間が存在するという点である。

こうした問題については、別の機会に足柄山の遊女に関する記事を取り上げて論じたことがある。²そこでは、上洛の旅の途次、足柄山で偶然出会った遊女達の姿に、孝標女が深い関心を寄せていることの象徴的意味について考察してみた。なぜそこに象徴性が認められるのかと言え

²伊藤守幸「『更級日記』における不在の〈他者〉」（『日本文学』、一九八八年四月）。後に、加筆の上『更級日記研究』（新典社、一九九五年）に所収。

ば、多くの旅行記を内包する『更級日記』のありようからは、人生を旅の視座から捉え直そうとする作者の姿勢が窺われるからである。旅の相の下に人生を捉え直そうとする作者が、四十年以上も昔の遊女達との一夜の遭遇について、迫真の筆致で再現し得ていることの意味を軽々に見逃すわけにはゆかないのである。なぜなら、遊女とは、まさしく旅としての人生を生きる存在だからである。他の同時代の女流作品には登場することの少ない遊女という存在に対して、十三歳の孝標女が共感に満ちたまなざしを向けていることの意味をそのように理解するとき、老残孤独の闇の中で人生行路を振り返りつつ『更級日記』の筆を進める作者と、旅する遊女達を包み込む足柄山の深い闇に目を凝らす少女とは、数十年の時を隔てて、実は同じものを見据えているのではないかとさえ考えられるのである。

さて、本稿では、上洛の記における作者の詠歌場面に着目しながら、右のような事情について更に考察を深めることにしたい。以下に引用する場面は、作中で作者が初めて歌を詠む場面である。それは同時に、『更級日記』における和歌の初出記事でもある。

昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし³

このような歌が『更級日記』の第一番目の歌として据えられていることには、どのような意味が認められるのだろうか。この点に関しては、すでに三角洋一が、次のような指摘を行なっている。すなわち、この歌には、「まののてう」の遺跡に触れた感慨を重ねて、「この日記が後の世の読者が彼女をしのぶよすがとなってくればよいという祈り」⁴も

³ 引用は、秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成）による。

⁴ 三角洋一「更級日記 歌ことば」（『国文学』、一九八一年一月）。

こめられているのではないかという指摘である。作者の思いが如何なるものだったのかという問いに確答は得られないとしても、このように遠い過去を志向する歌が、言葉による過去の再構築を進める『更級日記』の中に最初の歌として置かれているという事実の有する象徴性には、充分留意する必要がある。この場面の直後には作者の歌がもう一首記されているが、「くろとの浜」の風景を詠んだその歌を目にするとき、読者の感慨は一層複雑なものとなるはずである。

その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明かきに、風の音もいみじう心ほそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月

旅の途中で目に触れる一期一会の風景の貴重さを慈しむような思いのこめられた歌である。眼前の光景に対する愛惜の思いを伝えるこの歌は、現在の瞬間に対する切実な愛着を示すものとなっているが、同時にこの歌は、「今宵ならではいつか見む」という表現において、その「現在」を遠くから俯瞰するまなざしを覗かせるものともなっている。なぜなら、この表現は、東路を旅する機会を生涯を通じて二度と得られないかもしれないという予測を前提として成り立つものだからである（この予測は、当時のこととしてはきわめて蓋然性の高いものであり、現に孝標女は、『更級日記』の執筆に至るまで、その後再び東路を訪ねる機会を持たない）。

このようなまなざしの二重性は、もともと『更級日記』の執筆行為に内在するものである。そうした二重性が、ここでは十三歳の少女の歌の内部に認められるのである。自伝の執筆に多元的視点が必要とされることは誰もが認めるとしても、十三歳の少女がこのような歌を詠んでいることには、あるいは違和感を覚える読者もあるかもしれない。しかし、これら一連の作者の歌は、少なくとも上洛の記の内部において、読者に文脈上の違和感を覚えさせるようなものではない。

たとえば、上洛の旅を通じて孝標女が地方の伝承や昔語りに興味を示していることは、「まのてう」の伝説のみならず、竹芝伝説や富士川

伝説を書き留めていることから明らかである。そのように熱心に昔語りを筆録する少女が、「昔の跡」を偲ぶ歌を詠んだところで何の不思議もないのである。こうした古伝承に対する関心は、十三歳という年齢には不似合いな老成ぶりを示すものと受け取られるかもしれないが、作品冒頭に上総在住時代のこととして先ず記されるのが、物語への強い憧憬であることを勘案するとき、少女時代の性癖のあらわれとして、そこに一貫するものを認めることもできよう（後述するように、筆録された伝承には、内容的に物語憧憬と一括りには論じ難い面もあるのだが）。また、孝標女の精神的成熟度について付言するならば、彼女は、この旅の数カ月後には『源氏物語』を全巻読破し、法華経第五巻を習えという夢告まで得るような早熟な文学少女だったのである。『更級日記』から窺われるそうした少女時代の孝標女の気質と、彼女が上洛の旅の途中で詠んだ歌の内容は、何ら抵触するものではない。そんなわけで、これらの歌に文脈上の違和感は認められないのだが、それにしても、人生の旅立ちにあたって、頻りに昔語りに心を奪われたり、過ぎ行く時に対する愛惜の思いにとらわれたりするというのは、いささか屈折した心理を窺わせる事態ではある。上洛の記に書き留められたそうした微妙な心の動きからは、どのような作品論的意味が読み取られるのだろうか。

『更級日記』の起筆部において、上洛の旅は「物語を求める旅」として位置づけられている。もちろん、傍から見れば、それは上総介菅原孝標の帰任の旅にすぎないのだが、当時の孝標女にとって、都とは何よりも様々な物語の舞台であり、また多くの物語の流通する空間であったのだ。そんな憧れの都（物語）への旅は、自伝作品の冒頭に配置されることによって、人生の開幕を告げる旅としての意味をも担うことになる。すなわち、この上洛の旅は、明確に未来を志向する旅として意味づけられていたはずである。しかし、実際の上洛の記の内部では、右に見たように頻りに過去の事がかえりみられているのである。上洛の旅の果てには都での新しい生活が待つというのに、その未来へ向けて、孝標女は、まるで後ずさるように歩を進めるのである。こうした記述の在り方は、孝標女にとっての「あづま」の意味を改めて問い直させるものである。それと同時に、これらの記事は、作中における時間の扱い方という点で

『更級日記』が相当に複雑な構造を内包する作品であることをも示し

ているのである。

紙幅の制約もあって今はこれ以上詳しく論じられないが、『源氏物語』と『更級日記』は、時間と人間の関係が単純に一元的には捉えられないことを示した作品として、当代文学の中でも特異な共通性を有している。もちろん、多くの登場人物と三世代にわたる長大な時間を内包する『源氏物語』を、『更級日記』と同列に論じるわけにはゆかないし、時間処理の仕方という点で、『更級日記』が『源氏物語』から多くを学んでいることも明らかである。しかし、たとえば「まののてう」の伝承に関する記事を読み、そこに記された作者の歌の意味について考えるとき

日記文学の基盤をなす回想の方法こそが、反復的時間構造を浮かび上がらせるのに有効な方法であることに気づかされるし、そこには『源氏物語』のありようともまた異なる、特異な時間構造も認められるのである。

あらゆる文学技法を駆使する『源氏物語』は、日記文学的回想の方法をも巧みに利用しているが、物語において回想の方法を活用するためには、物語の内部に相当の時間の積み重ねが必要とされる（たとえば、若菜卷以降、『源氏物語』の筆致に回想的傾向が強まる点に関しては、三田村雅子の指摘がある）。⁵さすがの『源氏物語』にも、人生の出発点において、あたかも終末を見届けるかのように昔の長者の栄華の跡を歌に詠む少女など存在しないのである。

「朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし」一一川の中に立つ四本の柱とは、さながら遠く過ぎ去った時の形見である。そんな時の形見に心動かされて歌を詠む少女と、過ぎ行く人生の形見として『更級日記』を書き進める作者と、どこに違いがあるのだろうか。あたかもその間に存在する四十年の歳月が無に帰したかのように、遠い栄華の夢の跡を詠む少女の姿は、『更級日記』の筆を執る晩年の作者の姿と重ね合わされてしまうのである。これは一見奇妙な事態に見えるかもしれないが、実はここには人間と時間の関係をめぐる、ごく基本的な事実が示されているにすぎない。すなわち、線型的な時の流れの中で、人間は

⁵ 三田村雅子『源氏物語一一物語空間を読む』（筑摩書房、一九九七年）。

常にその流れの果てに位置する存在であり、十三歳の少女は十三歳なりに時の流れの果てに立って過去を振り返っているのだという基本的事実が、それである。そして、人間の時間のこの基本構造は、十三歳の少女にとっても五十代のおとなにとっても、何ら変わりはないのである。そのような理解に立つとき、人の一生とは、結局のところ、終わりが始まりであり、始まりが終わりであるような瞬間の、永劫の反復と見ることも可能である。人の生涯を織りなす時間のどの瞬間を取り出してみても、それは過去と未来のそれぞれの視座に応じて、起点と終点のどちらに意味づけることも可能な二重性を孕んでいるからである。

人生の旅立ちを迎えたばかりの少女が示す、時の形見のような廃墟への関心を、作品の冒頭に提示すること。あるいは、永遠の旅人としての遊女達の往還する深い闇、十三歳のまなざしが見届けたその深い闇、老残孤独の我が身を覆う闇と重ね合わせるように描くこと。そうした表現を通じて、『更級日記』は、始まりと終わりがひとつであるような永劫回帰的時間構造を鮮やかに描き出してみせたのである。

断片的叙述の積み重ねを通じて象徴的意味を開示するという、『更級日記』独自の方法は、人間の時間の二つの側面（無常迅速な変化の側面と永劫回帰的側面）をともに描き出すという困難な試みにとっても、有効に機能し得たのである。

なお、本稿では、紙幅の制約もあって、『源氏物語』の時間構造と『更級日記』の関係について具体的に論究することはできなかった。また、上洛の記に採録された地方伝承の内容や遊女の描写が、当時の貴族社会の一般的価値観や規範意識から逸脱する要素を含む点についても、なお考察すべき問題は残されているが、今後の課題としたい。⁶

⁶河添房江「更級日記」（『日本文学研究の現状I 古典』、有精堂、一九九二年）は、上洛の記に採録された三伝承（竹芝伝説、富士川伝説、真野の長者伝説）の反体制・反皇権的性格に注目している。物語憧憬（『源氏物語』に代表される雅びな物語への憧憬）や宮仕え願望から窺われる性向と、これらの特異な伝承との関係は、一見二律背反的にも見えるが、こうした異質な記事群の共存こそが『更級日記』の最大の特質と言っても過言ではない。それらの異質な記事群の関係に留意しながら孝標女の精神の振幅を見定めて行くことが、我々に残された課題である。

後者の問題について一言だけ付言しておく、東海道上洛の記はもともと都の外の世界を描いており、また、十三歳の少女の視点の導入によって、様々な規範意識の束縛を免れている点にも留意すべきであろう。しかし、一方で、この旅行記を執筆しているのは晩年の作者であり、彼女が宮仕えや天照御神信仰へのこだわりを作中の随所に記し留めているのを目にするとき、一見アナーキーなまでの自由を感じさせる上洛の記を、この多面的な自己像の中にどう位置づけるべきかという課題は残るのである。⁷

Excerpt

**Monogatari's Methodology and Nikki Literature:
On The Sarashina Diary**

Itō Moriyuki

Hirosaki University

The author of Kagerō nikki critically refers to monogatari's fictitious nature; she emphasizes, in contrast, nikkig's truthfulness. However, Sarashina nikki goes beyond such a naive binarism between monogatari and nikki. It is a nikki discussing the profound influence of monogatari on the author's own life. Takasue's daughter (Lady Sarashina, hereafter in this excerpt), Sarashina's author, is an avid reader of Genji monogatari, which contains critical commentaries on monogatari within its own monogatari. Inspired by The Tale, Lady Sarashina develops a

⁷本稿は、一九九七年十月、ミシガン大学で開催されたMAJLSの大会での発表に基づいている。当日の質疑を通じて、貴重なご意見をいただいた河添房江氏に感謝したい。

complex structure for nikki writing, in which multiple themes and motifs are interwoven.

This paper examines her complex structuring of narratological times by focusing attention on the beginning portion of Sarashina nikki, which describes the author's journey to Kyoto through Tōkaido. Lady Sarashina recollects her journey, which took place forty years before her actual writing. It is described through a thirteen-year-old girl's standpoint, without mingling comments of the author as an aging lady.

What is particularly unique in this nikki comes from the impression that the thirteen-year-old girl seems to have already grasped the truth of life which is now internalized by the author. For instance, there is an episode in which the girl meets a group of yūjo in the dark depth of Mt. Ashigara. The girl intuitively understands the symbolic meaning of yūjo as eternal travellers through life; she is deeply moved by her encounter with them.

Let me now focus on the first two poems included in this nikki. The journey toward the nation's capital, on the cultural foundation of which Genji monogatari's drama is developed, is a dream-come-true journey for the girl, who has been absorbed by The Tale; it should be a happy journey. Yet, the first episode of her journey highlights her emotional identification with the past, which has been lost for good. The very first poem expresses the girl's emotional response to a once prosperous mansion, now ruined. The second poem in the nikki, which appears right after the above episode, emphasizes the preciousness of being in a specific spot and time as a life traveller. Here again, the author

values life's impermanence and sees the present experience as if it is a passing dream.

The beginning episodes in Sarashina, thus, stress the present moment as an ending point of the accumulated past and indicate that the continuity and discontinuity between past and present are the girl's main source of emotional inspiration. This understanding of time is actually the foundation of Lady Sarashina's approach to nikki writing itself. Thus, the beginning portrayal of a girl nostalgically looking into the past is an isomorphic double of the author herself, who is writing recollections of her past days with a consistently nostalgic penchant for days long gone.

[E.S.]